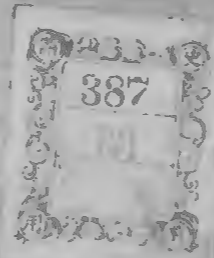


北  
鑑

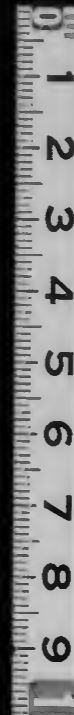
上  
杉

百  
五  
十  
三

庫 文 閣 内			
五 九 函	二 八 〇 冊	三 四 六 八 二 號	和 書 類



内 閣 文 庫	
番 號	和 34682
冊 數	278 (153)
函 號	159 1



57

藩鑑卷之三百七十八目錄

り部一

上杉弾正大弼藤原輝虎

藩鑑卷之二百七十八

上杉

彈正大弼友原輝虎（てらこ）は長尾信濃守  
為景（たけかげ）の四男にしては——長尾平三  
景虎と稱して遠祖は鎮守府將  
軍平良文の六代の孫輝念權五郎  
景政より八代長尾治郎景弘

是より代々長尾の十三代の子孫を信濃に  
在る家系とす。是は長尾の父あり為系  
為系よりし。是は長尾の父あり為系  
我中國府内在居城とす。我後國  
在封侯して所願とせし。天文十  
一年加賀國の合戦より敵の統帥  
より隔りて封死。是時長尾十三  
歳にして。後相傳と稱せり。長尾  
在六郎道系 或は暗系ともあり とす。りける。

是為系の遺跡を継ぐ。りける。  
不肖にして。國中私道とす。りける。  
家長等相議して。道系を廢し。  
長尾を遠くして。我後國春日山の  
城とす。是れより。亂亂開く。  
鎮より。是より。先二人は故め  
り。死せり。翌日十二年。家長  
首服して。自り。年三系虎

と石をまきつり其頃新聲ありし  
長尾越後も政景宗虎のといはれあり  
庄海り攻滅して願國を奪取ん  
とよき宗虎僅二千と是れとて小  
勢を以て政景と八千の人殺庄切  
殺せしり是より相勅し事志の  
ありしり國十四年政景力属  
て遂に降参しりりけし越後

一國悉く平治せしり翌十五年又  
弔軍せしんとて越中國を討入  
加賀能登の兩國を切滅し越後  
國もて攻取けり國十六年信濃  
の國主村上周防守義清武田晴信  
に戦ひ負け越後國を落すり  
宗虎より侍頼せしり是を援け  
布國より返し細道とて武田

家一と牙楯と及び信濃國川守  
鴻と押却とと勅事と教度  
ありき同古年同東の管領上杉  
憲政北條氏康と追逼とと就  
後國と奔りくと潛居ると京虎故  
主のよりとみあとの國國表結川と  
別館をあらとと叩とつと立  
の永祿二年三月憲政改姓ひと堪

と鎌倉八幡宮の爲にと上杉の  
家歸及び管領の職を譲りとの  
一字に授けらるとと政虎と名あり  
姓を後原と改め時と從四位中  
彈正少弼と叙任と後入道とと  
謙信と號せるとと勅使にり  
獨りの權大僧都法印と任せると  
石藏院と稱せると同三年丁丑月詔



よりより〜〜年月に遂にけむるは是  
利義輝より福見〜〜けむるは輝の  
一字に共〜〜輝より改め〜道  
管領職の免許に得〜〜輝虎  
十四歳の時より戦争止む時あり  
神後神中加賀能登佐渡飛騨  
上野中野陸奥出羽常陸等致箇  
國を討征〜〜北陸東山東海の

三道より猛威を振〜〜頃年織田  
信長は利義を輕蔑〜〜徳川  
と憤り甚〜〜信長を討滅さし  
と天正六年の春自國の積石解石  
を待たり〜〜二月半より病  
に即〜〜けむるは輝より改め  
と三月十日歳甲午九に〜〜終  
まり

一 長尾景虎は

後奈良院享祿三年丁酉寅正月十日  
府内はくく被生をよほし母儀文昭  
の御夢初ともあく八尺よりありあ  
胃全う色の甲冑を帯し戦をつき  
光昭赫奕しとも瑞を持物は乞毘沙  
門天王ありこの瑞は明星ありとて  
母儀の懐くし抛入給ふも思く懐

狂あり十箇月のりちうまく奇  
異の瑞相多し一筮者よりし其言  
あり本卦は天澤履の六三に當る  
其文は曰く履虎尾咥人凶武人成  
大君稍成長し志操あり度量  
せし勝過慈愛寛大に自然  
と仁心備るも瑞く父母も存りあり  
けし世奉る人あり



り  
北載軍記

一或説く曰く為景公の月家あるを  
不思儀の後庄見給ふ其後中の様  
は老僧月家の枕元より言ひて曰く  
吾より替の間其方の胎内を傳へ給  
ふなり月家の返言に吾等胎内を  
口傳ふやと云ふに吾等胎内を  
ありと云ふも又の中絶を云ふ

一七は叶ひし事なり  
彼僧聞く物く明日為景公の  
庄様の様なりと為景公は庄の  
下は明應寺なりと云ふ事  
うき事なるは實なりけり凡そ起  
月家件の後の子は為景公の妻  
様の繪は為景公の細は是庄聞  
是たり事なりと云ふ天の加護

倚くくつらうま英雄の男子を授け  
し給ふも昔々えしり吾の家再興  
の嘉瑞新しうと今在りし  
吾も同意のうに在りし  
斜あしき娘ひ神徳在り酒  
佳者を備へ家中の古を振る其  
祝儀歳重あり物し其  
りしり月室まらみ給く

もらつとものあく花水の僧  
しり花水の事し定めく為京  
語り給ひしあしん如の同心  
給ひし同し月室延き為  
累し語り侍りしあしん  
あり早し昭月なりし  
しりし僧とありし  
昭月を信りしあしん時

月家のつとく口信は何方より来  
しつり終ひしつとあつまふの彼僧  
あつて我は伊豆箱根の者なりと  
しひもよそてあつた月家のおの懐中  
に入ると見ると後貫一より又より  
降つてあつた遠妊しつて享禄三年庚寅  
胃子誕生あり亦事し存つた隠道な  
く取沙汰しつて景虎は箱根大

権現の化身ありしつとあつた

とあり春日山日記

一 長尾為景の長男六郎道景 御名に或は  
晴景に或は  
そと性純にしつとあつた武の急よあつた  
父為景常しつとあつた長子  
の儀をよの廢しつとあつたに思ひしつと  
後ねね及は兄道景とつとあつた身  
者りしつとあつたも母常の嬰兒

と遠し玩忽の類もひらき  
我よりよむおなほみ奇骨あり英  
氣大膽に——くちあつちのひん光  
臣等陳述——も用ひて且暮の遊  
戯は旗指お式は小石座つて武  
者押のまぬ或は右口お力業殺伐  
の事——のみありゆくと英名——  
鬼若夜と呼けり生ひ先の事と

うりうり——くちひ金り

——くちり 北越家書

一 猿松丸夜七歳に——奇りあはる無  
法に——て我慢日々に長——けら  
る習学問の為より春日山の禅院に  
泉寺へ入りて後——性極く教を  
ら——すまるとにつま——く和尙持扱ひ  
府城へ送り返すと訪とす八歳より

あり給ふ偽々為景思慮せし道  
て加治女藝者春徳の猶予と約せ  
らまけねも是も後松反義行  
ありては折檻を課せしとあり  
に在りては乃末見立序道景の純心  
を誦んし象の指し必是ありんと  
添くり筒ありしと松泉寺天室和  
尚より因縁を約せしと天文五年春

上旬後松反を撰出しと松泉寺へ  
送しと道一より和尙別ち教訓を最  
中合めしと下紙後古志那栢尾の  
浄安寺へ移しと門寮西堂よりありけ  
父子久離の形勢はと捨違はける  
乳母の又合津新三信篤法定女戸倉  
共八郎より中四五人被所しと從  
りし同上



一 為景の男孫王後號其性尋常に習  
り大膽なるゆゑ為景の氣をたうひ  
如家よせしんとて中納後掾尾津右  
衛門左衛門金津新之清佐とく中  
納後よおもむく米山納言よる米  
山はより四里りり四里りり孫王僅  
ろ八歳か如い歩侍の宵に負とく  
山を登る米山納言よ草葺の堂あ

り米山寺より其堂の極よ休  
く破籠やりのあを取ゆ孫王  
にもまいり世供の者も是食とく  
乳母父の本店も法も供あり孫王  
初が如い堂の極を廻り遊とく居  
らまはこの米中は又山にとく啼の  
薬師堂よりは預け府内を目的  
りよ見ありり孫王は



故郷府内の言は録も漢くみく徳  
母の謗言もく浪人にも事し無念  
あり成人へく平生をくむて  
亦滿より一戦もく一勝も亦な  
府内を目的のりよ見おるくく  
陣場よりく定ふ市店も作金津  
新玄陽舌をく少らひ感涙を流し  
其初を忘る後も亦く好も事

限りありく是別ち天文六年五月

猿王八歳の時あり

猿王小記  
身名必同書

一 猿松丸及古志の山家く敬遜せし是て  
のち是地あり自得ありて徒然  
の意にもく手習字問仕あり  
信ふ其修好日夜怠惰あり天然意  
用はく門幕西堂時く道理を推  
しそ暴行を直しむる布よ

遠くく和とある一くありはひ邪正  
の差別に會得一結び氣質漸  
く最初より易り結ぶ翌年己戌の秋  
淨安寺林泉寺執成に以て猿松庵  
及府城へ還入あり時より九歳あり

北越家書

一天文八年加川の越院調儀にあり  
越中越後の津藩へ向ひたり

養和一乱始狼藉より及ぶ長尾為  
景安よりおのひ越院越前へ際  
一合世三百より加川へ攻入彼凶  
賊に討てよと一とく其首尾に整へ  
今年七月軍勢を集め首途の長  
尾定らる折一も越中魚津の板屋  
刑部少輔教生津の江波三河守并よ  
加川一揆の長坪坂伯室守味方に共

一 郷導寺坊主の手前神文在指付  
無二の志在亦一 け道に為景世是在  
ふらふらと急ぐ加例の發向  
の所より執律の門流在養寺瑞象寺  
おとりの悪僧等坪坂在とゆふこ  
く願ふ心在愛せぬ元在坂  
て待らば一り遂ぐ伏乞の爲は為  
景隔り腹搔切く死せしむける

為景の龜在漸く収めく申廻り  
返り春日山林泉寺に葬る長尾  
六郎道景家督長尾七郎藏入義  
景後見一り形道とも六郎道景  
不肖に父祖の業在余くはき  
者よあつても猿松反は志量あり  
あはれも初少の儀おの義景在  
は一り家門長長く上在茂

に——と私意に在り——權に争ひ  
惡逆に在りて被ふ互ふは隅心——と自  
飛落木に在りしおのひに在りし<sup>同上</sup>  
一天文十年、猿松丸十二歳中、被後三條  
の城主長尾平六郎俊景、逆心其外  
敵より敵起りしを——中丸へ直りて攻入  
城中に在りしひり——の儀に——平  
道景力ありて城を圍ふとて坂戸へ落

りけり。猿松丸は二丸へ退去しけり。  
在る津伊良野、大膳ありしに敵  
襲ひしありて圍み——の漏出  
き、湖もありありありと凶徒の擧ぐ  
見え——所より青玄山、馬廻り山岸  
六脚板ありて射放し——其りし——  
急難に政い系し世——りしは、猿  
松丸に驚き、後より氣色あり

おはるゝ偶人正徳り山正徳拾ひ  
て終日武者押備肥の月試正り  
居たまひりり水陰よりり  
仲のあまは猿松及正徳ひ垣堀を  
破りりり間道より林永寺へ入来り  
世天室和尙に渡りりり折節淨  
母寺の門案西堂建徳りり密り相  
徳りり中越後へ奔りり市店若徳り

房長り預けりり其方は淨寺也

同上

一天文十一年壬寅景虎公十三歳白鹿  
月に従りりり智發明りりり  
まりり曾強人に超越りり信りり  
りり又為景公戦場に預命早世りり  
まりり一族老長等送心正企りり其  
國家正徳りり事正徳りり



是長兄立郎反不為すまゝに  
倭くくあり危にも角にも逆臣等  
臣討てしそ先祖の社稷を全くせ  
んと二六時中し心よ志道給りて  
らよなりし偽て家臣等よ告ぐ  
宣ふは我父の恩澤よ倭り豊饒  
に身よ難苦に志よまゝ  
修りた為よお家の志あり母等お

構くよく兄公の輔翼とありて  
國家に毒し保つしとあり家臣  
等亦事に用く月心にはあはれ  
しそも外にはりしそ  
色に愛しそ思召立知く  
志きしりに禮あしそ  
公是に笑しそ彼等ら胸中明  
察知し給しそ



群にそく各箇の所其理ありとく  
とも今に在りそく箇の事ありとく  
らそく強そく定ひ終り出家

信ふ 春日山日記

一 天文十一年猿松殿十三歳玄年の春  
より布店の城より寓居し信ひける  
う分別ありて金障新玄陽をひく  
間にそく是信せしそくは長兄道宗

府城より在城家門岩老乞在即  
つくそく如の國家の静謐もほく  
あまそく父存生の折りそく我は  
不興在交し事あり其父の思意  
在加しそく我は長兄の爲に  
礼在あし者との口意意あそく  
修在あしと趣ありそく政道の助  
言は思結しそく知れぬそく

あゝ〜ん〜うりはあ家〜して鶴の報  
若くも亦く云又尊霊の善徳は  
鶴〜吊ひまら〜せし事〜中後  
是に〜〜〜時今〜  
中句に〜〜山谷の積雪も亦の解  
温晴〜向ふ所の〜三子細  
あ〜〜空ひけ〜全津雲  
けは玄年〜先公他界以後延長

の爲〜因形して東西を辨〜  
か〜道景主の家賢を保〜  
是歴〜輔佐は〜疾〜  
も治平の化毛類疑ひあ〜  
君ま〜〜期に待つ〜信ひ〜  
當城〜鶴を建〜あの中野の  
賦は又〜血あ〜  
の魔り〜あひ〜信ひ〜運三所

了園くしん事まり勿蹄あきく口  
存一向息名捨くもくく目まく通  
年北陸道又畿内肌荒つく世  
妻少く道緑林茂る白波聲さ  
わくく一圓國の口心解詮あきく  
意はくく禮あけく様お返り  
わくく油くくも正あはくくおひ  
完あくくは龍錫の道くまのく座く

は轉くくくくく世くくあくく  
さくの時あくくもあくく是年捨  
身在むねくく儀あはくく竊盜  
の呵責もまく業因くくく是く  
國くくくまりくくありくく在の  
くくくも見くくけ予く用居の世  
も苦能くく世且は後者の釋料なも  
折くくはくく寄く信くくく二つあき

忠節もあまきても急もくくす  
この儀市店若師等に日後とす  
あはれもの柳岡せしは必死あり  
完賢徳も事ありあはれと定む六  
十一六部の妙典に細むる益壽く  
りし行者にたのみ頼く利發あ  
りく法號に宗心坊と改めり徒  
五人に石連ひひくりく市店の城に

統物く件の行者に道業月  
て四國よあらむく終り  
北新嘉書

一 景虎益壽くりく四國の僧くりち  
りく市店若師に館に忠むひ出四國  
修りと稱し先府内よあり先道  
景よひくりく對面し是にせありく  
りく四又為景干檀野にて對死  
りく越中は父の佛の廻りともよ

天正五年三月十日、國中、黒田、新田、  
等は、金谷、二人の仇あり、行方、是、  
事、世、う、や、御、白、に、為、景、討、死、あり、  
今年、ま、ま、と、六、年、年、景、康、景、生、  
害、あり、支、年、ま、あり、と、義、玄、在、あ、  
け、先、考、為、景、并、金、谷、二人の仇、  
殺、せ、し、ん、と、お、お、ひ、信、と、ま、ま、安、  
と、年、月、在、送、り、終、り、事、ま、ま、不、

覺、あり、ま、ま、の、因、中、黒、田、金、澤、昭、田、  
在、討、平、け、し、り、御、中、へ、改、入、  
先、考、為、景、の、四、弟、合、戦、あり、と、ま、ま、有、  
り、達、せ、し、ま、ま、より、景、康、は、御、中、へ、  
入り、父、の、討、死、の、場、所、右、戦、場、の、跡、  
に、り、り、流、流、致、し、多、佛、讀、經、  
と、頼、り、大、軍、に、り、當、國、へ、改、入、怒、  
敵、在、討、平、け、し、魂、在、あ、ま、ま、



きく首心仲るよ約諾し終ふ 北征軍記

一 景虎は幼少の僧にすまひひく矣  
河内羽を経歴し 園東及び諸方  
を廻因し 人情を探知り因るの  
風俗を見聞し 浚難の地或は城  
取の要害を巡見し 是れ後  
より景虎使者よあしきし  
吾一在の間よ武名を天下にあし

わし上洛せししあしきし  
るよきしはまの北陸道を討征し  
兼加賀越中越前を以て吾に忠  
あしきし等の願望あり 今  
京都の路に難道し 障碍あり  
し 畿内の擾乱を脱して世平陶  
に治め公方を守護し 是れ  
例の外ましくも掌し握りし



如しんと欲し故し、弼中加賀能登  
正一具し、朝倉氏舟の尉義景より  
城府正重く、隈ひ見し、うらあよ  
弼前より、趣く、あし、と、そ、河波、等、と、  
り、所、より、あし、り、如、朝、倉、義、景、何、と、  
し、て、聞、し、り、け、し、老、臣、朝、倉、正、重、  
右、邊、の、尉、正、重、に、使、者、と、し、て、差、遣、し、  
し、景、虎、に、謂、し、て、曰、く、嘗、也、

以、来、儀、の、り、兼、り、り、及、び、ひ、吸、朝  
平、ら、茅、屋、より、四、入、あり、と、幕、幕、石  
上、ら、ら、に、座、し、は、市、座、の、あり  
何、事、ら、是、に、去、し、し、と、り、景、虎  
聞、し、や、思、惟、し、徒、去、り、謂、く、い  
し、く、お、の、よ、に、是、朝、倉、の、恐、の、者、弼  
海、より、あ、し、と、我、國、正、重、去、る、事、と、  
告、知、し、し、る、もの、の、あ、し、し、知、る、は

當國より来たりて地形在部名の  
謀益あり明朝早旦より亦所在立  
きんには志しと頼く使者  
に對面し義景公は朝古奇しき  
口余給しるべきは存疑斜あり  
よんゆき余健りしと禮謝と  
伸くし有直しと頼み存疑あり  
空より使者立降りて返事したる

けも在朝倉つと聞くと亦人あるの  
未明より亦地在まらきとんは能く  
正しき詔封の返言あり我別ら  
亦人より先達とて途中にお向んと  
て翌日曉天よりあり道筋の村屋  
にあり相待しけり業のこしと  
景亮其所より来たりし義景別  
ち遠くお遇しと其志在實し系

虎つゝく予ら恩意甚しし酌日に  
堪へり公の知意深うく予ら事  
感ふ猶餘りありし宣ふ義景  
後席に設け酒肴を進めし以  
て餐意せしむ景亮辞さるる身  
能くしし是まて以の芳志  
謝するに詞ありし酒盃献剛の禮  
終りし割席乞うて去り信ひぬ

細後軍記

一 宗心坊景亮若狭へ移脚ありし武  
田義統并より逸見栗屋白井相宮  
に手合國士の城邑を巡見し給ひ  
江別高鴻那の山中へ出比良の社  
竹生瀧へ参詣し給ふ當國の俗々  
本家連綿恩補の所領ありし古より  
石の白旗中の割席を乞ふ

後ひ多賀玄至石塔寺金猪石山  
琵琶湖粟津系園城寺台炭の三  
塔まて心閑に一見ありて少島跡を  
郎と相紹の商人滋賀郡大津の  
侯々年身越後へ行通ひ親々  
きまゝ毛尾尋々考りくのりな  
閑えけ進の西界のひひひひひひ  
て山門東塔の南谷栄光塔の阿闍

梨宣祐の里塔東坂ありありありに  
宗の塔は移しまりせ後仍の殿  
骨は体ぬ給ふも後商買の便に  
つきては折々古郷の音信をも  
聞石岫のるる月よらんをさま  
杉の嵐よ夢をなうまゝ時のお  
るに待給ふも  
北越家書  
一景虎公敵のり高居のときより伝矣

駿河守是初始く通見くはるく後  
河守は其先武内大臣より出たり  
往年、園東の管領上杉家より奉仕  
て食邑在降白物に園東大より礼送  
く上杉家の弓矢末よりあり侮奸  
曲の臣在愛く賢良の臣在跡み  
そ家傾廢より及んて是初是  
在悲ひあらく諫言たあらし

この金言身より送くおびは  
管領更に兼行あり却く是初  
在にくみ邪臣の言在用ひく水  
分の死在賜く手杉子あり  
に在りて是初諫言の容く  
在知く官録在辞く東園  
出ひしより京師よりあり敵山  
勢居く生命在余く



あつて良將の死遇を待て其  
志を達せんと欲す景虎公亦  
自ら要す一聞傳へ給ひて定  
行の寓所より到り當世の事は諸  
らも定行より公の非常の資を  
るに思ふ吾家も傳へる所の  
神武の大道に臨み是に接し  
景虎公より悦びてつと願ふ

は予の軍師と相も事  
に謀るん願ふ他事を  
宣ふ駿河も感激してつと君  
の天資に思ふに補ふ天のゆか  
給ふ英雄ありつとつと以後も  
悦び給へつとつと景虎公喜  
び給ひ給へつと君長の義をむ

春日山日記  
北城家書



一景虎公より依る駿河も是れは因み  
常より相遇しき當世活乱の事  
及び武將する身の恥辱の跡等  
在問給ふと云うは是れ景虎の智  
勇ある生質を觀察しき武家  
に相傳せむ神武の大道を授け  
し演説して曰くしん文武あ  
道の根元は仁と義との二つなり

ゆかり天下國家を保つ者は  
文武を専らしき文武を以て  
天子を治むは王道なり武道を  
以て國家を治むは霸道あり故  
に君臣ともよみ非難する時あり  
泰平の基ありとすは文武の  
暗くしき驕を極め人慾恣に  
て貨賤を貪り衣履冠帯美に

くみし身を飾り淫乱を樂び者  
是亡國の志あり故より  
は武を以て表と文を以て裏と  
正天の時を飾り地の利を飾り人の  
私を飾り君臣の禮を護み市中の  
義を飾り信を傾く民を教ふは  
徳んは道に道に道に道に道に  
是に理

是より禮を以て是に接するに  
仁を以て是を以て是に受て  
は親を以て是を以て是に  
忠を以て是を以て是に  
生を以て是を以て是に  
謀を以て是を以て是に  
正天の志を以て是を以て  
利害を以て是を以て是に

所あり武は弱く強敵に犯し攻  
むに勤る所あり若二つのもを在審  
りよましくわらうく勝敗に新白福よ  
又と武甚る異ありしつても其  
理一あり在に治むるよ政事の正  
しきに又と礼せよ証罰の正  
しきと武と将と者は言よ及  
りしと事ととは文武の在に正

ましくその在に正しんと能せる  
らう仁義にちり忠孝に先と  
弓馬の道に習練し合戦玄術  
の利よんを教は二六時中よ軍事  
に習ひ心に勵まし又祖の名に  
汚ましく新のこしくに在得く  
元惡に戒よ小善に勸め用ある  
者に賞し敵まらる者に罰まらる

武才より武道より志士のの曹を  
くくはあはるくは義信を  
所くは備へ中は勇忠を以て  
ゆくは君より徳を明く  
まの天中の人降服より  
はるは海より敵を  
て治めらるるに自智より  
聖君國家を治め給ふ

如く將より人を治めり  
の間も人の心を治めり  
心より敬をもちり  
心を以て善悪を  
人には一の理より  
申和の道あり  
ありを理より  
の性善あり天に

負人よありては仁義禮智賢愚  
ともにもまろしきことくも聖人  
は私欲よ覆りてまろしき其性の  
まろしき故よ堯舜を稱  
性善の證跡とまろしき五常の道とまろしき  
ときには邪説よ入る事ありて馬  
の家よ生息ありて合戦と術  
能程志とまろしき強ち乱在は

うりに陽とまろしき治まろしき世よ  
手継ありてまろしき中けお景虎大  
にほろしき願はるは平の軍師  
とまろしき相たりて事な謀るを請  
りてけ

戦後軍記



藩鑑卷之二百七十九目錄

う部二

上杉弾正大弼藤原輝虎